

小林 莉子 「女性芸人とジェンダー
～「女性芸人の壁」と切り開いた存在意義」

要旨

ジェンダー差別や容姿いじりに対する社会意識の高まりを背景に、「モテない」「デブ」「ブス」などといった“いじられ役”を背負わされてきた女性芸人の存在意義が変化している。

一昔前のお笑い界では、『女性にお笑いは不向きである。』という定説があったと言われている。これは、人を笑わせることが得意なのは男性であるとし、女性に笑いは不利であると考えられていたからである。男性芸人に比べ、不利な立場にあった女性芸人だが、現在、女性芸人をテレビで見ない日はあるだろうか。彼女達はそのような状況から抜け出し、お笑い界にその存在感を露わにしているのだ。「2023 年ブレイク芸人ランキング」では、数々の男性芸人を抑え女性ピン芸人の「やす子」が見事 1 位を獲得している。また 2022 年にも、「やす子」は 4 位にランクインしており、「ヒコロヒー」が 3 位を獲得。2021 年には、「ぼる塾」が 3 位を獲得している。また、7 位に「ヒコロヒー」、10 位に「蛙亭」がランクイン。2020 年は、2 位に「フワちゃん」、3 位に「3 時のヒロイン」、8 位に「ぼる塾」と 3 組の女性芸人がランクインした。女性芸人が男性芸人に引け目を取らず、人気を博していることが分かる結果となったのではないだろうか。「お笑いは男性のもの」という従来の考えはもう古いのである。

また、長い間、男女お笑いコンビというスタイルは夫婦漫才がベーシックなスタイルであり、それ以外は存在していなかった。しかし近年、夫婦でもカップルでもない、あくまで芸のために結成された「ビジネス男女コンビ」が増加している。ここで注目したいのは、「ネタを作っている方はどちらなのか」という点だ。男性が主導権を握っている男女コンビが多いのは事実であるが、2011 年以降、女性が主導権を握っている男女コンビが増えている。代表的なコンビとして、「蛙亭 2011 年 結成」、「ラランド 2014 年 結成」、「人間横丁 2020 年 結成」が挙げられる。

彼女等は、相方の男性芸人に比べて存在感を発揮しており独特のセンスを武器に大活躍している。ここでもまた、男性芸人の方がお笑いに向いているという考えは間違っているのだと言えるのではないか。

以上のことから、女性芸人の活躍が目覚ましいことがわかった。

「お笑いは男性のもの」という固定概念を覆し、彼女達がここまで活躍の場を広げた背景にはどのような思いがあったのか。女性芸人の歴史をもとに、彼女達がぶつかってきた壁、テレビや社会について調査し、新たに切り開いていった存在意義を考え論じていく。